

# 大拙の評価

東京・本郷で六月中旬、「鈴木大拙と日本の軍国主義」という討論会があった。オーストラリアのアデレード大学から招かれたブライアン・ヴィクトリア博士が「彼は結局、うそつきだった」と発言し、議論は盛り上がった。

曹洞宗の僧籍も持つ博士は、二〇〇一年に『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』（光人社）という本を出版した。禅宗の老師たちがいかに戦争を肯定していたか、戦後もどれだけの反省をしていたのか、当時の発言を詳しく検証する内容だ。大筋としては市川白弦の名著『仏教者の戦争責任』が土台になっているのだが、渡米した仏教者の発言を発掘するなど、米国生ま

善	南
財	無

菅原伸郎

れの研究者らしい分析も含まれている。関精拙、山崎益洲、原田祖岳、安谷白雲、山本玄峰、山田無文といった人たちが次々に批判されており、禅門の弟子筋に当たる人々からは反発する声も出ていた。

そうした一人として鈴木大拙も取り上げられたのだが、敗戦直前に書かれた『日本の靈性』などでは偏狭な国粹主義に対する批判もしていたはずだ。少し酷ではないか、という意見もあつて、東京大学の末木文美土教授らが討

論を呼びかけたのだった。ヴィクトリアさんは冒頭の発題で、若き日の大拙の手紙などを紹介しながらこう述べた。「彼は社会主義にも共鳴し、帝国主義や皇室崇拜の危険を十分に知っていた。それなのに戦争反対を明確にしなかつたのは、御身大切だったからで、多くの知識人と同じ臆病者だった」

これに対して、東京大学の教室に集まった約五十人の研究者や僧侶からは反論が相次いだ。石井公成・駒沢短大教授は「市川白弦は自分が尊敬していたからこそ、『仏教者の戦争責任』で西田幾多郎や鈴木大拙に厳しかったのだ。その辺りの事情を無視して、他の戦争賛美者と同列に大拙を扱うことは間違いだ」などと批判した。ほかの参加者からは「大拙の発言には確かにブレがある。しかし、それは時と場合

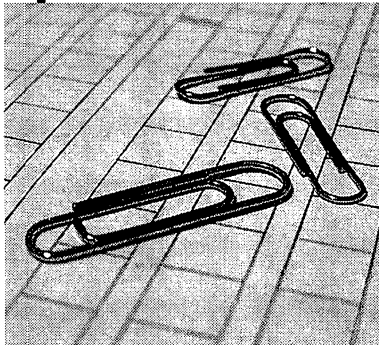
に応じて現実的に話していたからであり、いわば対機説法という面もあったのではないか」「軍人たちに好まれた『劍禪一如』などは仏法と何の関係もない、という本書の指摘は正しい」といった発言もあった。

やや押され気味だったヴィクトリアさんは、終わり近くになって「米国がいまイラクで行っていることも含め、戦争で敵を殺しても構わない、という論理は仏法から出てくるだろうか。」

『聖戦』を認める経典があるなら教えてほしい」と問いかけた。正法護持のために刀杖を用いた有徳王の説話（涅槃経）を紹介したり、「韓国や中国では僧侶が侵略者を撃退する戦いに協力した事例はある」と報告したりする人もいたが、もとより難問であり、考え込む人が多くなった。ベトナム反戦運

動の闘士だった博士の問いに軽々しくは答えられない、という空気もあったろう。そこで、私は思い切つて手を挙げてみた。

「キリスト教神学者のボンヘッファーは、戦争続行反対のためにヒトラー暗殺計画に加わり、発覚して処刑された。牧師の行動としては批判もされようが、これはこれで赦されるべきではないか。物事を二元対立として考えない仏教思想をもとに考えるなら、



不殺生戒といえども相対的であり、そういうした極限状況においては全否定されないはずだ。もちろん、遠い他国にまで武器を持って出かけていくことを認めるわけではないが……」

この説明も「一殺多生」といったテロの論理に利用されかねないし、もちろん、絶対というわけではない。あくまで状況次第であり、だからこそ、大岡昇平は戦場体験を綴った小説『俘虜記』の冒頭に「わがこころのよくてころさずにあらず」（歎異抄）という親鸞の言葉を掲げたのではなかったか。そんな説明をして、さらに「仏教には、極端な立場にとらわれない『中道』という言葉もありますよ」と話してみたのだが、やはり、ヴィクトリアさんは不満そうだった。

（すがわら・のぶお／ジャーナリスト）